様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月 10　日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間： 2009 ～2012
課題番号：２１５９２９０５
研究課題名（和文）　高齢者ケアのためのリフレクションを活用したチームづくりに関する研究
研究課題名（英文）　Research on the team construction by practical use of reflection for an elderly-people care
研究代表者
青木　由美恵（AOKI　YUMIE）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：60347250

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高齢者ケアの実践能力向上に向けて、変革していくチームづくりのための継続教育方法を、リフレクションの活用により開発することである。アプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングによる介入を実践の一部に位置づけ、アクションリサーチにより、その効果を検証した。リフレクションの理解の為の講義およびリフレクションを活用したセッションによる教育は、より高齢者のニーズに即した看護チームとして発展させる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the this study is to develop the method of educating the continuance for the revolutionized team-making aiming at the practice ability improvement of caring the elderly people by using the reflection. Intervention by the reflective learning by the appreciative approach was located partially of practice, and the effect was verified by the action research. As for the education by the session that used the lecture and the reflection for the understanding of the reflection, the possibility of developing it as a team that meeting elderly people's needs was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：地域・老年看護学
キーワード：リフレクション・高齢者ケア・継続教育・チームづくり

１．研究開始当初の背景

リフレクションの重要性が日本でも認識され、現在はこれを取り入れる教育・実践の場が少しずつ増えている。今後は活用が進むにつれて、リフレクションの形骸化やネガティブな体験による問題も浮上してくると考えられる。そこで本研究のアプリシエイティブ・アプローチによるポジティブ

な取り組みへの展開は、実践能力の向上とともに実践者に成長への動機とやりがいを与え、離職防止や変革につながるチーム・組織づくりの基礎になるといえる。このことは、高齢者看護・介護の質向上に寄与するものである。

近年日本でも認められてきたリフレクションは、実践の意味を探求して自己を振り返り、自己承認するなど、感情や行動の領域と共に認知領域の発展を支える。このように実践を通じて専門職としての認識力を高めながら、看護師が自ら一生涯学び続けていくのに適したものだといわれている。1980年代から英国を中心に看護界でもその教育ツールとしての重要性が実証され、2000年に英国のNursing and Midwifery Council（看護助産評議会）の看護師・保健師・助産師にとってリフレクションは必須条件であり、基礎及び卒後継続教育のプログラムの中で行われるべきである、と宣言された。1994年からはBulmanらにより、英国の看護教育カリキュラムにリフレクションが据えられている。

研究者はこれまで段階的にリフレクションに関する研究を進めてきた。英国のナーシング・ホームで看護師の卒後継続教育の実態調査を行い、その機会や内容は十分ではないことから、介入の必要性とその方法への示唆を得た(Aoki&Davies 2002)。また、英国の老年看護領域でリフレクションを展開し、その教育的効果を明らかにした（Aoki 2002)。さらに英国での実践から、日本でリフレクションを活用するための環境に関する課題を明らかにした（青木 2003)。また、リフレクションの導入のために、Gibbs のリフレクティブ・サイクルによる実際の展開をデータとして分析し、リフレクションの潜在的な問題点も明らかにした（青木 2002)。そして、Ｓ県内の看護職の実態調査では、卒後継続教育の機会が不十分であり、実践能力向上への継続教育の検討が望まれている現状を把握した。その後、看護師のリフレクションの構造を明らかにするとともに、看護におけるリフレクションの発展してきた欧米と日本との文化的背景の相違を考慮したうえで、日本での教育方法の開発に取り組んできている。

英語圏の教育学・看護学領域では、Schöne(1983)以後、多くリフレクション研究がされており(Gibbs 1988, Atkins&Murphy 1993, Brookfield 1995)、近年は、リフレクションの形骸化やネガティブな体験による潜在的問題もしばしば論じられている。このような中、リフレクションをより継続的・効果的に活用するために、真価を発見し認めるアプリシエイティブ・アプローチを取り入れることは、より良い実践を創造するとともにチーム・組織づくりに寄与する可能性があることが明らかにされている（Ghaye 2005)。

２．研究の目的

本研究の目的は、高齢者ケアの実践能力向上に向けて、変革していくチームづくりのための継続教育方法をリフレクションの活用により開発することである。

高齢者ケアの実践には、保健医療従事者の連携により限られた資源を有効に活用することが必要である。そのためには、ケアの中心的な役割を果たす看護師および介護従事者の実践能力の向上は非常に重要である。しかし、特に高齢者ケアの現場では人手不足が深刻化し、ケア従事者は疲弊し意欲までも喪失している。このような状況の中で、日々の実践をふりかえることから学び、実践からの手ごたえややりがいをチームの中で得ていくことは、離職の予防にもつながると考える。

本研究では従来のような実践のとまどいや失敗に注目するリフレクションのアプローチとは異なり、うまく機能していることや強み・可能性などのポジティブな面に注目するアプリシエイティブ・アプローチをリフレクションに活用し、アクションリサーチを展開する。それにより否定的・固定的な枠組みが外され、個人のエンパワーメントと実践の改善に留まらず、組織全体がコミットメントする多くの可能性を包含した戦略・計画を生み出す文化の醸成が期待される。このことは、高齢者ケアの質向上に寄与すると考えられる。

３．研究の方法

まず、高齢者看護・介護におけるリフレクション活用の促進・阻害要因について、現場を観察・分析し「気づき」を抽出して、解決すべき課題として具体化し､改善の工夫を立案した。次に、英国におけるアプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングについて、現状を明らかにした。さらに、アプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングによる介入を実践の一部に位置づけ、介護老人福祉施設のスタッフおよび総合病院の成人病棟看護師とともにアクションリサーチのサイクルに従い研究者の関与のもと、予備調査、実践、観察、リフレクションを繰り返し、その効果を

検証した。

本研究では、研究期間を通してアクションリサーチの枠組み（Meyer, 1993）の計画、行動、観察、振り返りという段階を以下のような過程で進めた。

（1）課題を検討し､問題を設定する。

（2）文献研究、予備調査として実践の観察を行ない実態の把握をした。

（3）予備調査を踏まえて、実現可能な到達目標（仮説）を定め、当面の対策を立てた。

（4）目標達成のために改善策として、アプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングを､実践のための訓練・教育の一部として行った。

（5）リフレクションのセッション後にアンケートにて参加者への調査を行なった。

（6）一定期間の継続的な介入後、インタビューを行ない質的帰納的に分析し、チームの変化を評価・省察（リフレクション）した。

４．研究成果

（1）先行研究の文献検討を行い、①看護・介護におけるリフレクション活用の促進・阻害要因、②英国におけるアプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングについての課題を検討した。

（2）英国におけるアプリシエイティブ・アプローチによるリフレクティブ・ラーニングについては、既に実践者へのインタビューのみ終了していた為データ分析をすすめた。また、イギリスにおける実際のリフレクションを活用した保健医療福祉従事者を対象としたワークショップの及び教育プログラムの運営について、その現状の調査を行った。プログラムの構成内容の確認、プログラム企画・実践者へのインタビューを行った。実際には、10週間にわたるプログラムのため、プログラムのセッションに参加して調査を行うことは出来なかった。しかし、教育プログラム受講者がその後どのように実践を行っているかについて、実践現場において具体的な活動を調査した。具体的なチーム作りへの効果については、今後も追加調査が必要である。

（3）今回の展開過程は、4つの局面に分けられた。第1の局面は、2施設の管理者およびスタッフから実践課題に関する聞き取り調査を行い、それぞれの施設の課題を特定した。総合病院における到達目標は、「リフレクションの理解と活用を促すアプローチにより、看護を語る機会が増えて、リフレクションが日常の看護に活用されていくような変化が見られる」とした。

第2の局面は、総合病院の中間管理職の看護師を中心とした対象者、に平成23年9月～10月にリフレクションの概要の講義およびアプリシエイティブ・アプローチを活用したリフレクションのワークショップを開催し、ワークショップ後は記述式アンケート調査と分析を行った。ワークショップは異なる参加者を対象に半日ずつ2回開催し、参加者はそれぞれ23名と24名であった。参加者の80.0%は「この研修で得たことは今後の自分にとって役に立ちそう」と答えており（図1)、実際の活用前の講義としては効果的であった。

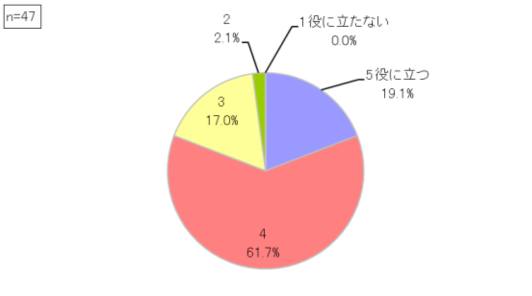

図 1

第3の局面は、介入として個人およびグループによるリフレクションによるセッションを毎月1回、60分間行った。この介入は、病棟の枠を越えて看護部が主催し、看護師の自由な参加を得て実施し、何が起きているのかを観察し、フィールドノートに記録し、探究・解釈を進めた。10か月間の介入の後、推進者となっている看護部スタッフ3名へのインタビューから、セッションに参加したスタッフの【リフレクションへの関心の高まり】や【リフレクションがもたらす変化への実感】が明らかになった。また、【リフレクションという言葉の日々の実践の中で使用】が見受けられるようになり、【病棟での開催への広がり】を示し始めたという変化がとらえられた。そこで、さらに計画修正を行ない、展開を継続した。

第4の局面は、到達目標に向けてワークショップを継続開催して個人およびチームにおける変化についての評価とリフレクションを行った。ケアの質の向上のために看護師の実践経験についてのリフレクションと看護実践を語り共有することを目的として、リフレクションの対話セッションを行っていった。その経験について5名の看護師にインタビュー調査を行った。インタビューデータを質的帰納的に分析した結果、【病院におけ

る高齢者のニーズの共有】や【看護と看護実践上の問題の共有と理解】、【リフレクションの過程を通してのエンパワーメント】がされていること感じていた。 また看護師は、リフレクションの過程で【発問のスキルの向上】した実感をもち、病棟における【リフレクションの機会をチーム内で自らつくる意欲】を語るに至り、そのことがキャリア発達に有益であると確信していた。さらに、チームによる【実践内容の共有機会や実践結果の評価機会の増加】がリフレクションによりみられるなど、実践の質の向上を示唆す状況が認められた。 これらのことから、リフレクションを活用したアプローチおよび継続教育方法が、より高齢者のニーズを満たして看護チームを発展させる可能性が推察された。

以上の4つのそれぞれの局面についてデータの分析を行ったが、今後はさらに分析を進めて展開過程の4局面における変化を明らかにする必要がある。

(4) 以上のことから、リフレクションの理解と活用を促す講義による導入教育、およびリフレクションのワークショップを継続的に企画し参加を得ることにより、より高齢者のニーズに即した看護チームとして発展させる可能性が示唆された。

今後は、今回の介入によりリフレクションを経験した看護師が中心となり、病棟単位のチームとしてリフレクションを展開しながら、チームの変化について検証していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１ 件）

① 青木由美恵、Using reflection for understanding and meeting the needs of older people in Japan, Center for Ageing Research International Conference, 2012年9月5日～2012年9月7日 , イギリス ランカスター.

６．研究組織

(1)研究代表者

青木 由美恵（AOKI YUMIE）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：60347250

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）

研究者番号：